

Press Release

報道関係者各位



〒107-6011 東京都港区赤坂1-12-32-11F
 TEL: 03-5545-3303 FAX: 03-5545-3305
 ホームページ <http://www.ssf.or.jp>

「子どもの運動・スポーツ指導者の意識等に関する調査」報告発表

子どもの運動・スポーツ指導者の現状が明らかに。

キーワードは「複合種目」・「適切な頻度と時間」

「スポーツ・フォー・エブリワン」を推進する公益財団法人笹川スポーツ財団（所在地：東京都港区赤坂 理事長：小野清子 以下：SSF）では、子ども・青少年スポーツ指導者の実態と現代の子どものスポーツの課題を明らかにすることを目的に、わが国最大の青少年スポーツ団体である日本スポーツ少年団の指導者約700人を対象としたアンケート調査を実施しました。

以下に主な調査結果をご報告いたします。ご参照いただければ幸いです。

（1）運動・スポーツ指導種目（上位）

子どもの運動能力向上には複合種目の重要性を認識しながらも、約9割が「単一種目」を指導

年間を通じて様々な種目を取り入れて活動する「複合種目」を指導している指導者は、全体の9.3%にとどまり、単一スポーツの指導者が大多数を占めていた。主な種目としては「サッカー」が15.8%と最も多く、次いで「軟式野球」が15.1%、「バレーボール」13.8%、「剣道」10.9%、があげられた。一方、ほとんどの指導者（95.7%）は子どもの運動能力を高めるには、いろいろな運動遊びを経験することが重要であると認識している。

（2）運動・スポーツ指導実施頻度（1週間あたりの指導回数）

実施頻度は平均で週2.4回。また、「週4～7回」と回答した指導者も15.0%存在

指導頻度は、「週2回」が36.0%と最も多く、次いで「週1回」が24.1%、「週3回」21.6%と続く。平均実施頻度は2.4回であり、週1～3回の指導を行っている指導者が8割以上を占める結果となった。

（3）高頻度（週4～7日）・長時間（180分以上）指導している運動・スポーツ種目と年代

幼少年期の子どもには、適切な頻度と時間のスポーツ指導が望まれる

高頻度、長時間指導している種目としては、「軟式野球」「バレーボール」が29.0%と最も多く、次いで「柔道」が9.7%、「剣道」「ソフトボール」6.5%と続く。また、その中で指導されている子どもの年代は、「小学生」が69.6%と7割近くを占め、次いで「中学生」が22.7%、「未就学児」5.9%であった。種目によっては、指導時間や頻度の検討とともに、特に未就学児や小学校低学年の子どもなど、小さな子どもたちに対する指導方法や内容について留意する必要があると言える。

この件に関するお問合せ先

笹川スポーツ財団 スポーツ政策研究所：武長・澁谷

TEL: 03-5545-3303 data@ssf.or.jp

今回の調査結果から [まとめ]

大多数の指導者が単一スポーツを指導しており、種目によっては高頻度・長時間活動している実態が明らかとなった。一方で、ほとんどの指導者は子どもの運動能力を高めるには、いろいろな運動遊びを経験することが重要であると認識していた。スポーツ少年団には年間を通じ、様々な種目を取り入れて活動する「複合種目」があるが、複合種目の指導者は全体の9.3%にとどまっていた。子どもにとって望ましい環境を認識していても、実際には勝敗を優先してしまっている指導者の姿があるのではないだろうか。同一地域の指導者が連携し合って、子ども達が様々な運動遊びや複数のスポーツを経験できるような仕組みづくりが今後の課題である。

◆調査概要

調査の名称	子どもの運動・スポーツ指導者の意識等に関する調査
調査の目的	①子どもの運動・スポーツ活動に関する指導者の意識や考え方の実態を把握し問題点を明らかにする。 ②指導者に求められ、高められるべきリテラシーについて考察し、子どもが生涯を通じて運動・スポーツ活動に親しむことができるような指導のあり方を追究する。
対象	スポーツ少年団指導者 698人(男性:588人、女性:106人) 日本体育協会が毎年開催しているスポーツ少年団指導者全国研究大会および、全国各地で開催されるスポーツ少年団認定育成員研修会に参加する指導者
調査方法	直接配布直接回収による無記名式の質問紙調査
調査内容	(1)対象者の基本属性 指導経験年数、取得資格状況、幼少年期における運動・スポーツ実施状況など (2)運動・スポーツ指導状況 指導している運動・スポーツ種目、子どもの学年、指導頻度、指導時間 (3)運動・スポーツ指導に関する意識 運動・スポーツを指導する際に参考にしているもの、運動・スポーツ指導への期待、子どもの運動能力向上・運動指導に関する考え (4)外部指導者の実態 外部指導者制度の認知度、外部指導者の経験の有無、指導内容など
調査時期	平成23年6月～11月
共同研究者	中村 和彦(山梨大学教育人間科学部 教授)
調査協力	公益財団法人日本体育協会 日本スポーツ少年団

◆調査結果詳細

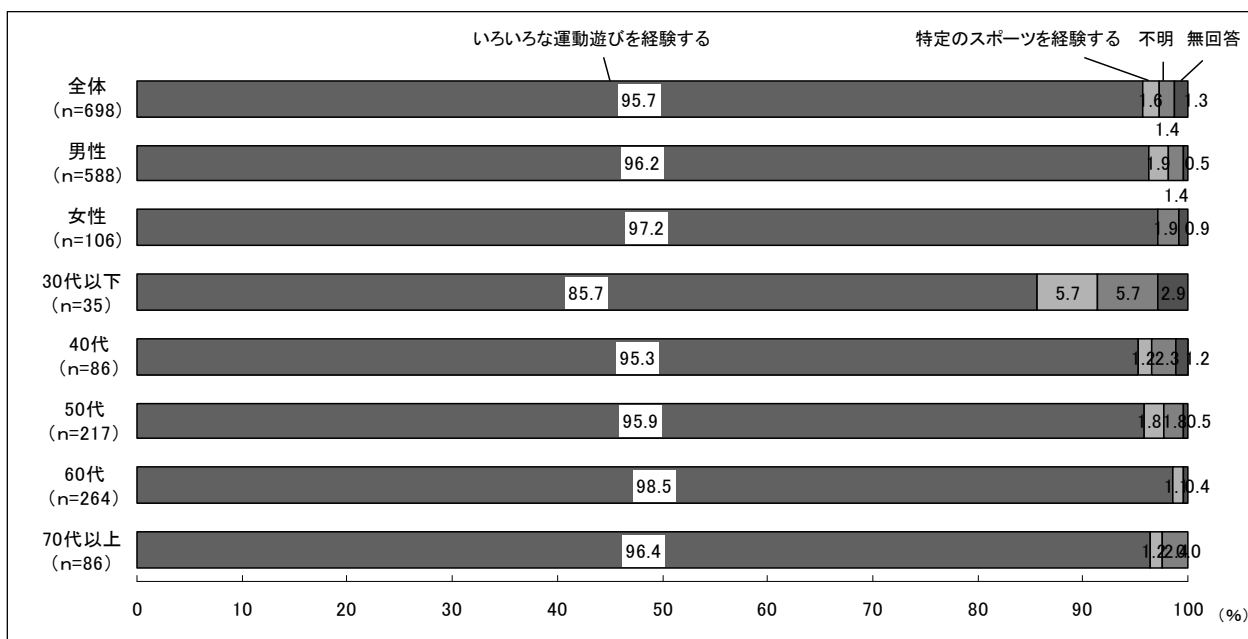
(1) 運動・スポーツ指導種目（上位）

子どもの運動能力向上には複合種目の重要性を認識しながらも、約9割が「単一種目」を指導

①運動・スポーツ指導種目（全体・性別）

全体 (n=622)			男性 (n=528)			女性 (n=94)		
順位	指導種目	%	順位	指導種目	%	順位	指導種目	%
1	サッカー	15.8	1	サッカー	18.2	1	バレーボール	23.4
2	軟式野球	15.1	2	軟式野球	17.4	2	複合種目	12.8
3	バレーボール	13.8	3	バレーボール	12.1	3	水泳	10.6
4	剣道	10.9	4	剣道	11.4	4	バスケットボール	8.5
5	複合種目	9.3	5	空手道	9.5	5	剣道	7.4
6	空手道	9.0	6	複合種目	8.7	6	空手道	6.4
7	バスケットボール	7.6	7	バスケットボール	7.4		硬式テニス	6.4

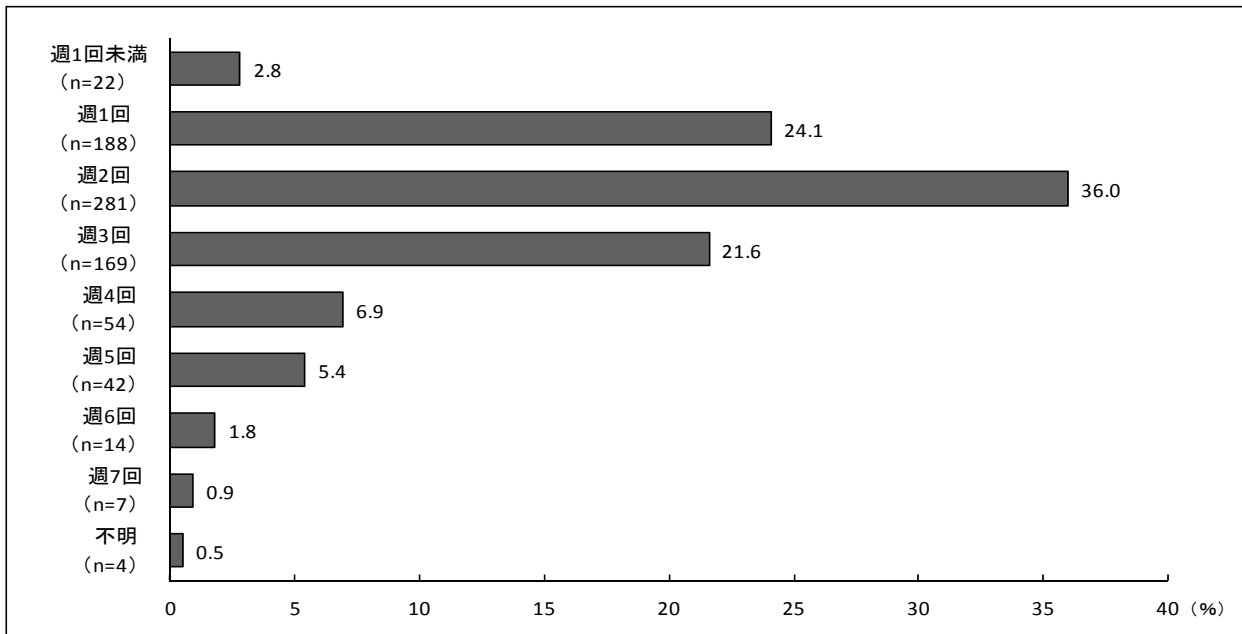
②子供の運動能力向上に関する考え（全体・性別・年代別）



(2) 運動・スポーツ指導実施頻度（1週間あたりの指導回数）

実施頻度は平均で週2.4回。また、「週4~7回」と回答した指導者も15.0%存在

①指導頻度

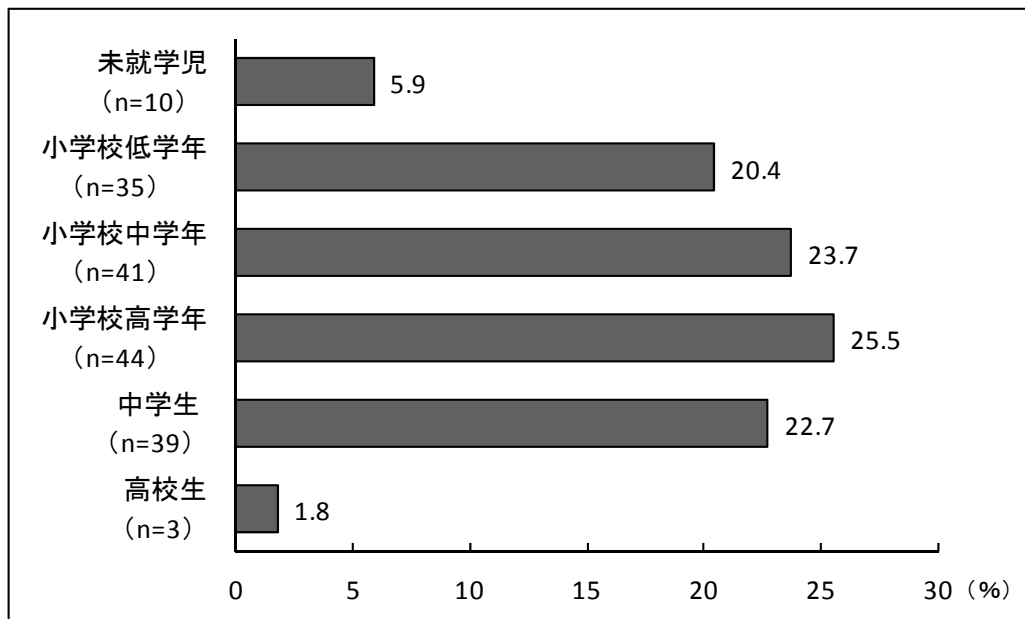


(3) 高頻度（週4～7日）・長時間（180分以上）指導している運動・スポーツ種目と年代
 幼少年期の子どもには、適切な頻度と時間のスポーツ指導が望まれる

①高頻度・長時間指導している運動・スポーツ種目

「週4～7回」「180分以上／回」実施種目 (n=31)		
順位	指導種目	%
1	軟式野球	29.0
	バレーボール	29.0
3	柔道	9.7
4	剣道	6.5
	ソフトボール	6.5
6	サッカー	3.2
	空手道	3.2
	ソフトテニス	3.2
	水泳	3.2
	硬式テニス	3.2
	硬式野球	3.2

②高頻度・長時間指導している年代



●笹川スポーツ財団 WEB サイト (<http://www.ssf.or.jp/>) では、笹川スポーツ財団が保有するスポーツ関連のデータを公開しています。